東京都江戸東京博物館紀要　第12号　2022年３月
Bulletin of the Edo-Tokyo Museum, No. 12, pp. 35－47, March, 2022

菊竹清訓設計の江戸東京博物館について

早　川　典　子*

目　次

はじめに
１　両国について
２　江戸東京博物館の「かたち」について
３　博物館（ミュージアム）への考え方
４　自然光
５　事務所所蔵の資料ついて
おわりに

キーワード　建築家　菊竹清訓　ミュージアム　自然光　図面資料　アーカイブス

はじめに

2022年（令和４）３月31日をもって、東京都江戸東京博物館（以下、「江戸東京博物館」とする）は、大規模改修のために休館することとなった。休館期間は、2022年４月から2025年（令和７）度中までを予定している。

本稿では、この大規模改修に際して、江戸東京博物館の設計者である菊竹清訓が、設計にあたり、発行された書籍や、雑誌等に寄稿した言説を現在の目線で改めて読み直すことにより、設計時と、建物の竣工から約30年を経た現在の江戸東京博物館を取り巻く環境について、改めて考えてみたい。

菊竹清訓は、1928年（昭和３）福岡県久留米市生まれ。1950年（昭和25）に早稲田大学理工学部建築学科卒業後、竹中工務店に入社、1952年（昭和27）に村野・森建築設計事務所入所を経て、1953年（昭和28)、25歳で菊竹建築研究所を設立した。

主な作品は、石橋文化センター・美術館（現：久留米市美術館　福岡県久留米市　1956年・昭和31）スカイハウス（東京都文京区　1958年・昭和33)、出雲大社庁の舎（島根県出雲市　1963年・昭和38)、ホテル東光園（鳥取県米子市　1964年・昭和39)、パシフィックホテル茅ヶ崎（神奈川県茅ケ崎市　1966年・昭和41)、都城市民会館（宮崎県都城市　1966年・昭和41)、川崎市市民ミュージアム（神奈川県川崎市　1988年・昭和63)、江戸東京博物館（東京都墨田区　1993年・平成５)、島根県立美術館（島

*東京都江戸東京博物館学芸員

根県松江市　1998年･平成10)、九州国立博物館（福岡県太宰府市　2004年･平成16）などが挙げられる。2011年（平成23）に亡くなった。

江戸東京博物館の設置計画は、鈴木俊一都知事の都政下、1980年代に始まっている。1986年（昭和61）９月、東京都生活文化局は、「東京都江戸東京博物館基本構想」を策定した。その後、江戸東京博物館の設計候補者の選定が始まったのは、同年10月からである。『江戸東京博物館　建設のあゆみ―建設と開設準備の記録―』（財団法人東京都歴史文化財団　1997年発行）は、東京都生活文化局において、長年江戸東京博物館を担当していた吉田孝之参事（当時）が建設の経緯をまとめた報告書であり、建設の経緯について詳しく書かれている。以下、本書に基づき時系列に見ていく。

江戸東京博物館の設計候補者の選定方法については、東京都設計候補者選定委員会（東京都財務局所管）に付議して決められることとなった。この委員会は1986年（昭和61）12月から開催された。委員は、次の10名である。学識経験者委員７名と東京都委員３名による構成となっている。（所属・肩書は当時）

安達健二（文化庁顧問、元文化庁長官・前東京国立近代美術館館長）
沖　種郎（株式会社設計連合代表取締役、元芝浦工業大学学長）
穂積信夫（早稲田大学教授）
内井昭蔵（株式会社内井昭蔵建築設計事務所　代表取締役）
香山壽夫（東京大学教授）
小林　茂（東京都昇降機安全協議会理事長、元財務局技監）
山口　廣（日本大学教授）
東京都財務局長
東京都財務局技監
東京都生活文化局長

この東京都設計候補者選定委員会は、11回にわたって行われ、まずは、選定方式をプロポーザル方式に定めたあと、各委員から設計候補者を推薦してもらうことを決定する。そして、委員の推薦を経て、菊竹清訓と黒川紀章（黒川紀章建築都市設計事務所）、佐々木群（佐藤武夫設計事務所）の３者がプロポーザルに参加している。

委員会の経過をみると、プロポーザル参加者と、参加要領の決定が５月14日の委員会とあり、このときに、プランと模型の提出期限を６月29日に定めた。

その後、７月17日の委員会において、委員が提出資料をもとに審議しているが、最終的に決めることができず、設計候補者へのヒアリングを実施している。

以上の過程を経て、菊竹清訓は、1987年（昭和62）８月27日、江戸東京博物館の設計者に選定された。この選定委員会による選定理由としては『新建築』1987年10月号によると　①日本的原型を保持し、新しい形態を追求している　②隣接する国技館との調和を考え、街のスカイラインとして残るものを目指している　③広場による新空間の創造を図っている　以上の３つを挙げている。この選定では、プロ

ポーザルの中に無報酬でエスキース模型の提出が義務づけられていたことなどから、議論を呼んだという[1)]。

江戸東京博物館の設計期間は、1987年（昭和62）10月から1989年（平成１）３月まで。建築工事期間は、1989年６月から1992年（平成４）11月であった。

江戸東京博物館の設計者として菊竹清訓が建設に関わった期間は、延べ約６年に及んだ。

【写真１】鈴木都知事と菊竹清訓『江戸東京博物館　建設のあゆみ』（19頁）[2)]

特筆すべきこととして、1989年６月に菊竹は、鹿島出版会から『江戸東京博物館』という書籍を発行している。設計終了後工事着手の前に、博物館のありかた自体に問題提起を行う意図であったという。

建築計画の途中で、建築家が設計の意図についてまとめた本を出版するのはあまり事例がないと思われるが、菊竹自身が「これらの本によって、江戸東京博物館のより具体的な内容が、豊富なものとなり、より多くの方に知っていただき、参加していただいて、ご批判も受け、多くの知恵を授けていただき、建築の実現に取り組めれば､こんな幸せはないと思っている」（「あとがき」196頁）と記している。今回、大規模改修を迎えるにあたり、改めてこの本を読み返してみると、菊竹清訓の先見性に驚く。以下、菊竹の言葉から、いくつかのテーマを絞って読み解くこととする。

１　両国について

江戸東京博物館の建設用地は複数の候補があった。その中でも両国は、以下のような理由で最終的に決定された。

（１）都有地（旧江東市場跡地　14,321㎡）と隣接する旧国鉄用地（操車場等の跡地　16,372㎡）を買収することにより、約30,000㎡の用地が確保できる。

（２）両国駅の北側に隣接し、交通が便利である。

（３）近くに回向院、吉良邸跡、北斎生誕地などがあり、江戸東京の歴史とゆかりが深い。

両国は、江戸時代からの盛り場であり、回向院では相撲の興行が開催されていた。1909年（明治42）には、大相撲の常設場所として回向院の隣に旧国技館が建てられた。1950年（昭和25）、大相撲は蔵前国技館に移った。しかし、両国国技館は1984年（昭和59）に現在の場所に建設されている。

両国駅は、かつては房総方面へのターミナル駅として栄えた。現在、商業施設「江戸NOREN」として親しまれている旧両国駅舎[3)]は直線と曲線を取り入れたモダンなデザインになっている。両国駅は、1972年（昭和47）に総武本線の東京～錦糸町間が開通したあと、ターミナル駅としての機能を失った。

菊竹清訓『江戸東京博物館』では、以下のような記述を見ることができる。

両国は下町の中心として交通上の要点にあり、いろいろな施設が整備されて、博物館、教育、文化施設の集中したディストリクトが今後かたちづくられていくであろう。（中略）防災の拠点、防災広場になるような緑地を持ったオープンスペースを充分もったものになることが期待される。そのために大街区として考え、大きな広場を充分に街区の中央に取るような配慮が必要になってくる。

この広場を、人工地盤方式でつくるか、それとも地上面をそのまま利用するか、空間利用の仕方にはいろいろあるが、少なくとも江戸東京博物館と国技館がその広場に面して建っているかたちをとることは自然な考え方であろう。この広場に向かって、両国駅から新しい北口ができ、その広場の正面に震災記念堂が見え、片や、隅田川に降りていく公園が開けているというかたちが考えられる。私は建築だけでなく、周辺整備についても押さえていくことが必要であろうと思っている。（７頁）

相撲の期間中は泊まって相撲を見るとか、あるいは両国の花火を見物するとか、お祭とか、江戸東京博物館を見るといったように下町の情緒に触れ、そういう催しのためにホテルが利用されるのは望ましい。（中略）人工デッキの下はバスの発着、あるいはパーキングの施設を入れる。それによって国技館、あるいは江戸東京博物館への車の利用にも役立つであろう。（中略）異種間の交通の乗り換えの問題を解決したいと思う。この用地に続いて周辺にはNTTの敷地がある。ここが下町の情報センターになれば当然NTTも何らかのかたちで協力への働きかけが必要になるであろう。（中略）

（墨田）区役所は移転するようなので、区役所の跡地をどう利用するか。学校グループをどこにまとめて立地させるかも合わせて考えたい。（11頁）

1989年（平成１）時点で、菊竹は両国界隈の計画をきちんと把握して、江戸東京博物館の設計に生かしていたことがわかる。2021年（令和３）現在の江戸東京博物館の周辺環境をまとめると以下のとおりとなる。

地下鉄12号線は、2000年（平成12）に全面開通し、「都営大江戸線」と呼ばれるようになった。ＪＲ両国駅と大江戸線の両国駅は、徒歩で５分程度かかり、「同じ駅名でも乗り換えが大変な駅」として話題になることも多い。菊竹の構想では、江戸東京博物館側に、ＪＲ両国駅北口の出口を設け、江戸東京博物館の３階の江戸東京ひろば（以下、「３階ひろば」とする）を通って、地下鉄に乗り換えることを

計画していた。そのため、両国駅のホームと、３階ひろばの高さをそろえている。

博物館の敷地に隣接した墨田区役所跡地には､25階建ての国際ファッションセンタービルが建てられ、2000年（平成12）に竣工した。国際ファッションセンター株式会社は、墨田区、東京都、国（独立行政法人中小企業基盤整備機構）と民間企業（繊維製造業を中核とする中小企業、及びアパレル・商社・金融機関など）を株主とする第三セクターとして設立された。オフィスとホテル、レストラン、郵便局等が入ったオフィスビルである。

ＮＴＴの敷地には、2004年（平成16）に27階建てのNTTドコモ墨田ビルが竣工した。NTTドコモが所有するオフィスビルで、NTTドコモ歴史展示スクエアという、NTTドコモ関連の無線通信機器の展示施設を併設している。 塔屋部分に鉄塔があり、そこにはNTTドコモが利用するアンテナが配置されている。

NTTドコモ墨田ビルができる前は、江戸東京博物館の３階ひろばからは、毎年７月に行われる隅田川花火大会の花火を眺めることができた。花火大会当日には、ブルーシートをもって、３階ひろばに集まる地域住民の姿もあった。しかし､このビルが建ったあとは､ほとんど花火を見ることはできなくなった。

2021年（令和３）現在、両国駅前のシンボル的な風景となったのは、アパホテル＆リゾート「両国駅タワー」である。地上31階、地下２階、高さ108mで、2020年（令和２）に竣工した。東側の窓から、江戸東京博物館を見下ろすことができる。

菊竹清訓が、江戸東京博物館の計画時に考慮した、国技館を考慮したスカイライン。現在は、そのような考慮があったとは思えないくらい両国駅周辺は、高層ビルが林立している。

【写真２】両国駅ホームからみた両国駅前の風景写真
（2021年10月撮影）

【写真３】アパホテル東側窓からみた江戸東京博物館（2020年８月撮影）

【写真４】両国駅舎と江戸東京博物館（2019年１月撮影）

つぎに、江戸東京博物館開館後の1993年（平成５）５月号の『新建築』のインタビューでは、菊竹は以下のように答えている。

私は、博物館の敷地の周りの500m角くらいの地区を今後さらに整備していく必要があると思っています。この整備の方向は、民間の施設を街区の周縁に写し、耐火建築にするというものです。中央の東京都慰霊堂の周りは、公共的な公園にし、さらに公園に接して学校の運動場にする。こうして地下にパーキングを取り、屋上を庭園にするようなことを考えれば環境緑化ができ、この地域全体の防災街区や避難広場の役割も十分果たすことができると思います。（中略）この周辺の下町に住んでいる方々にとっては、1923年の関東大震災で７万人もの人を亡くした記憶がいまだに強烈にあると思いますし、戦災時もおなじようにこの地区を避難の場所としていたのですから、そういった地区に対する記憶を具体的に安全に切り替えていくような計画が要請されています。（166頁）

両国地域には、明治期に設置された陸軍被服廠があった。しかし、1922年（大正11）に赤羽に移転し、東京市（当時）が跡地を買収し横網町公園として整備していた途中で1923年（大正12）９月１日に関東大震災が起こった。周辺から多くの人が、この場所に避難したが、地震で発生した火災による火災旋風が発生した。結果、公園に避難した人だけで38,000人もの人が犠牲になったという。のち、ここには建築家伊東忠太設計による慰霊堂が建てられた。慰霊堂についての言及は前述の『江戸東京博物館』に何度か登場し、菊竹は伊東忠太建築にも配慮していたことがうかがえる。

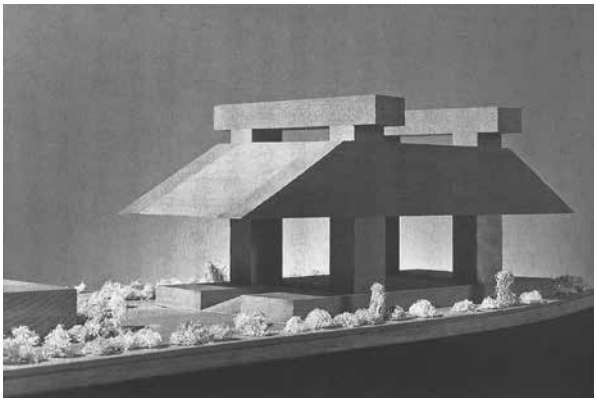
２　江戸東京博物館の「かたち」について

菊竹清訓は、「か･かた･かたち」という独自のデザインのための方法論を提示している。詳細は、『代謝建築論　か・かた・かたち』（彰国社　1969年・昭和44発行）に詳しい。〈か〉とは、「本質論的段階」「思考や構想」を指し、〈かた〉とは、「実体論的段階」「理解や技術」であり、〈かたち〉とは、「現象論的段階」「感覚や形態」のことだという。

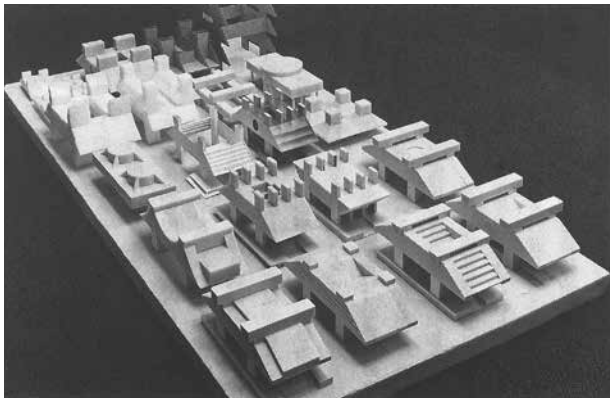
菊竹は、江戸東京博物館のかたちについて「西欧的なイメージでないもの」「伝統的な形や姿を借りるような方法は取りたくない」『江戸東京博物館』（185頁）と考えていたという。

「日本の伝統的な建築に、形態的に若干似ているところがあるかもしれないが、江戸東京博物館は、オフィスビルのような真四角な建物とは違った形態をもつものでなければならない」『江戸東京博物館』（190頁）と述べている。

その結果、ひとつは高床の博物館であること、また雨の多い我が国では屋根のある広場が必要と考えたようである。江戸東京博物館におけるピロティの採用は、自邸であるスカイハウス（1958年・昭和33）や、海上都市構想にみられるような、大地あるいは水面からの離陸であるように思われるが、さまざまな要素を検討した結果であることがうかがえる。



【写真５】第一次基本案『江戸東京博物館』（184頁）



【写真６】比較検討に用いた模型『江戸東京博物館』（185頁）

また、菊竹清訓は開館後の『建築文化』1993年（平成５）７月号に、「東京都江戸東京博物館のかたち」という文章を寄せている。見る側からの「かたち」にも言及しており、大変興味深い。

江戸東京博物館の「かたち」は、結果としての「かたち」で、「かたち」が先行してあって、それに内容を詰め込んだものではない。「かたち」が先にあって、勝手に機能を想像するのは、生活者の立場で見た「かたち」の認識であろう。（中略）

これまでにどんな思考が「かたち」をめぐって取りかわされたかをみてみよう。

ａ　「神殿」：伊勢や出雲に代表される神殿

ｂ　「高床の倉」：として正倉院があり、こういうものを考えた構想だったのではないかとも言われ

ている。

c　「大屋根」：が屋根の傾斜した形がとりあげられた。

d　「木造建築」：という最も建築の基本的な構造から考えられた「かたち」

e　「京都国際会議場コンペ案」：４本の柱で支えられていることから、この形態的類似性

f　「アクアポリス」：海洋構造物の原型

つくる側としては、これらの生活の側、使う側、見る側の思考に学ぶところが多い。みんな正しい見方で間違ってはいない。（中略）直感の世界の「かたち」がいかに強烈なインパクトと浸透力をもっているかをうかがわせるものがある。（142 ～ 143頁）

菊竹自身によるこれらの例示のうち、博物館の性質上、「高床の倉」という表現は、このかたちを見る側にとっては、一番納得しやすい表現なのではないかと考えられる。

また、『新建築』1993年５月号のインタビューでは、江戸東京博物館の高さを約62mに決めたのは、江戸城天守の高さはが62mあったと考えられていることを尊重したと語っている。かつての江戸城の天守の高さで、東京湾や関東平野がどのように見えていたのかを体験してもらいたいという、菊竹の明確な意図を反映している。

３　博物館（ミュージアム）への考え方

菊竹清訓と博物館の関わりは、島根県立博物館（1959年・昭和34）、出雲大社庁の舎（1963年・昭和38）のほか、1988年（昭和63）に竣工した川崎市民ミュージアムなどが挙げられる。

江戸東京博物館の当初のスケッチをみると、主展示室（常設展示室）と収蔵庫を積層した上部空間と、企画展示室、大ホール、ミュージアムショップなどを配置した下部空間を４本の柱でつなぎ、広いピロティをイベントひろばとして活用する案は、初期の計画からずっと変わっていないようである。

前述の『江戸東京博物館』には、以下のようにミュージアムへの考えが述べられている。

ミュージアムというのは人と人が出会い、人とものが出会い、人と歴史が出会い、人が文化と出会う、といったかたちで、人間が非常に多くの問題に出会う。（中略）これまでのような、収蔵を中心とした調査・研究のミュージアム、どのように展示するかという物の展示場としてのミュージアムに加えて、もっとアクティブに、ダイナミックにコミュニケーションの場をつくり上げ、未来に向かっての新しい、いろいろな問題を社会に投げ掛けていく、そういう都市ミュージアムがこれから必要だと思われる。（15頁）

ここでは、そういう日本の文化が建造物に結晶していると考える時、建築的シンボルを展示に展開し、建築そのもので示すことも考えられる。日ごろからシンボルとして挙げられる鳥居とか橋とか、塔や城など今一度振り返ってみると、イメージとして展示には橋が適するのではないか。それも現寸

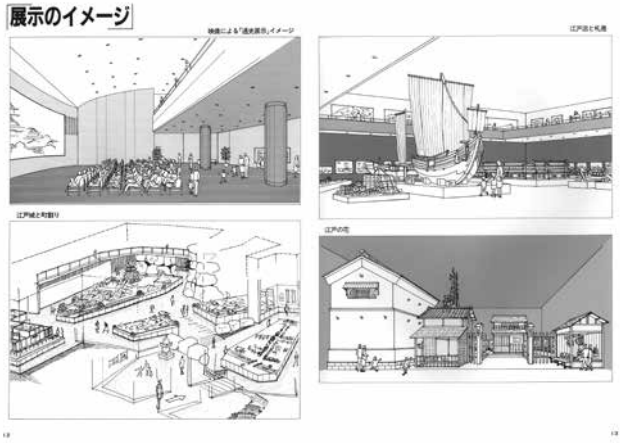
の日本橋がいい。（一部分のみ）　日本橋を渡ってその向こうに江戸城天守閣があるという構図が浮かんでくる。また、橋によって江戸と東京の展示を区切ればよいのではないか。（中略）

この博物館における展示が橋から始まるのは印象的で、展示としてのシンボル性を充分示してくれると考えられる。さらに、橋を渡った先に、江戸城がみられるようにしたい。映像でもいいから、16世紀に日本全国で次々つくられた城の姿を見せ、そのシンボルとして江戸城が出て来るのは、やはり非常に強烈なインパクトを与えてくれるもののように私には思われた。（183 ～ 184頁）

江戸東京博物館の６階から常設展示室に入ると、吹き抜けの大空間に、日本橋が復元されている。

前述した1986年（昭和61）９月「東京都江戸東京博物館基本構想」（東京都生活文化局）の中に、展示イメージ図が掲載されているが、ここには、日本橋や、それに類するものは描かれていない。

この日本橋の復元は、江戸東京博物館の常設展示が始まるにふさわしい、ダイナミックなプランであるが、常設展示の内容を検討していく過程で決まったのではなく、菊竹清訓が、建物の設計の過程で出した案であることがわかる。



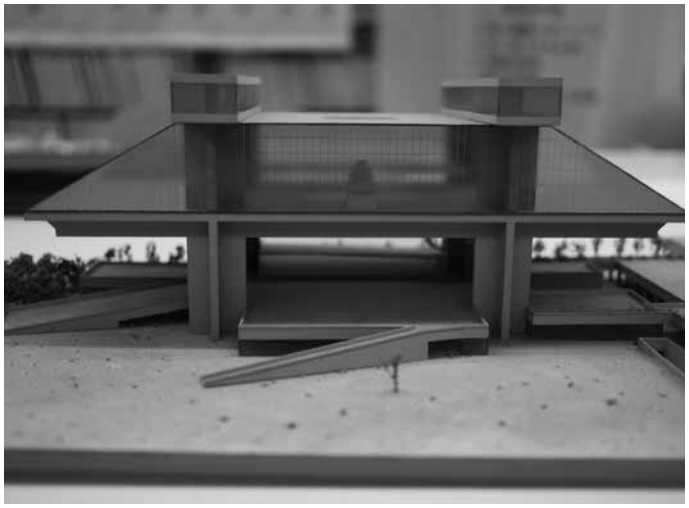
【写真７】常設展示イメージ図『東京都江戸東京博物館基本構想』（12 ～ 13頁）

【写真８】工事中の日本橋のようす『江戸東京博物館建設のあゆみ』（47頁）

４　自然光

菊竹清訓は当初、自然光を大きく取り入れた主展示室（常設展示室）を考えていたようだ。しかし、常設展示室の展示内容が決まっていく段階で、資料保護の観点から、変更されたと思われる。前述の『江戸東京博物館』には、以下のような記述がある。

日本の従来の博物館では、自然光はできるだけ用いず、すべて人工照明で展示を見せるのが主流であったが、世界の博物館の動向や、将来のことを考えて、やはり自然光重視を打ち出した。そのためには、ガラスの透明度を自由に変える技術とか、あるいは反射率を変えるとか、また直射日光や紫外線をカッ



【写真９】ガラス張り模型写真（所蔵：建築情報）

トするような技術とか目覚ましい進歩を遂げている素材の新技術を使うことを考えた。（191頁）

これを裏付けるような、ガラス張りを計画した当時の模型が、後述する事務所所蔵の資料群の中に残されていた【写真９】。

菊竹清訓は、『新建築』1993年（平成５）５月号のインタビューでは以下のように話している。

当初、（常設展示では模型を中心とする）町並み展示が主な内容ということだったので自然光を入れることにしたわけです。傾斜屋根を全面ガラスにして、朝日や夕陽を東西方向に開放しました。照明を節約でき、博物館の省エネルギーに役立ち、運営費を圧縮できることも魅力です。もちろん、ガラス屋根には調光装置をつけ、紫外線カットなどで「江戸東京博物館」の展示室を独特の環境とスケールに挑戦しようとしたわけです。そして、展示室全体が一目でわかるように一室にし、展示室中央は空中展示のため必要な高さを取りました。この空間構成をそのまま外観に表したものです。（165頁）

ガラス張りで計画していた当時の名残は、傾斜した屋根であるといえるだろう。

５　事務所所蔵の資料ついて

菊竹清訓は、2011年（平成23）に亡くなり、逝去から７年後の2018年（平成30）３月31日に菊竹清訓建築設計事務所は閉鎖されている。

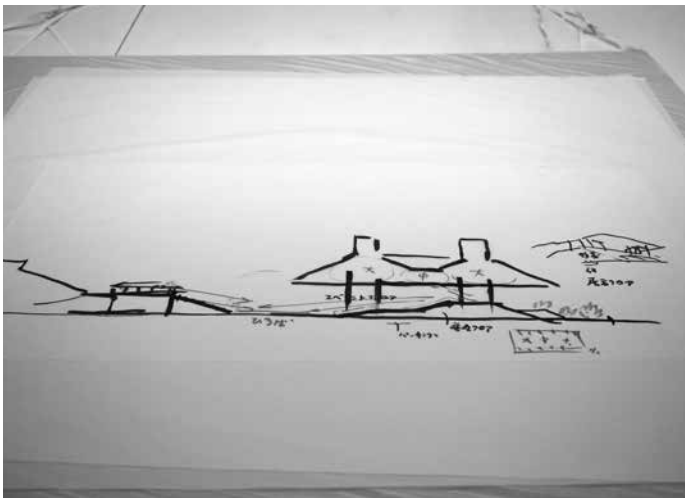
2014年（平成26）10月、国立近現代建築資料館において、「建築のこころ　アーカイブにみる菊竹清訓」という展覧会が開催された。この展覧会のために、事務所所蔵の図面類は、継続的に国立近現代建築資料館にて収集されることとなり、少しずつ整理が進められているという。

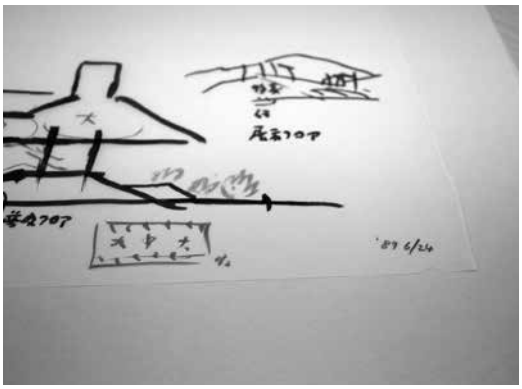
現在、事務所に残されている図面類は、株式会社建築情報（代表スミス睦子氏）が管理している。本稿の執筆にあたり、同社が所蔵している江戸東京博物館の関係資料について、調査の時間を取ることを計画していたが、2021年（令和３）の新型コロナ感染症による緊急事態宣言等により、充分な調査時間を確保することが難しくなってしまった。

また、2021年２月、島根県立美術館において「菊竹清訓　山陰と建築」という展覧会が開催された。この展覧会では、江戸東京博物館のスケッチや、模型も展示された。

この展覧会への出品資料を中心に、2021年10月、文京区大塚にある株式会社建築情報において保管されている江戸東京博物館の菊竹によるスケッチ等を拝見させていただいた。このときは、スミス睦子氏のほか、事務所を長い間支えておられた塚本二朗氏、東京理科大学の斎藤信吾氏にもご協力を賜った。

本稿「はじめに」にて記したとおり、江戸東京博物館のプロポーザルにおいて、参加者の設計案と模型の提出期限は1987年（昭和62）６月29日であることが分かっているが、建築情報には1987年６月24日の日付入りのスケッチが残されている。





左【写真10－1】江戸東京博物館　スケッチ　1987年6月24日
トレーシングペーパー・インク　42.2×89.5（所蔵：建築情報）
右【写真10－2】江戸東京博物館　同スケッチ　日付部分拡大

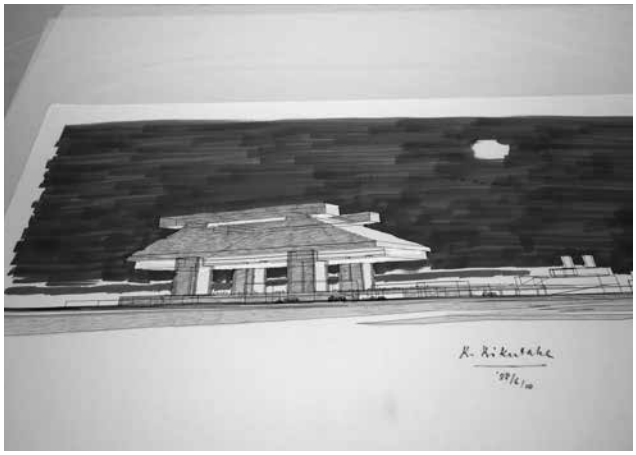
継続的に、図面資料の整理を進めているとのことであるが、江戸東京博物館に関する図面類は、【写真11・12】のような図面ボックスに入っている。「江戸東京博物館」のラベルがついたものが50箱はあるとのお話である。

また、【写真13】の透視図は設計途中段階の1988年（昭和63）６月11日の日付があり、建物の「かたち」は定まったあとのものと思われる。ピロティの下には、駐車場が描かれている。

当館館長の藤森照信は、常設展示室の展示委員をしていたことから、この準備当時に、「菊竹さんが日本橋を描いたスケッチを見た記憶がある」と話している。引き続き、資料の調査を継続していきたい。

【写真11】江戸東京博物館　図面ボックス１
（所蔵：建築情報）

【写真12】江戸東京博物館　図面ボックス２
（所蔵：建築情報）



【写真13】江戸東京博物館　透視図　1988年6月11日
紙・インク　59.1×87.8
（所蔵：建築情報）

おわりに

2019年（令和１）10月、菊竹清訓設計の川崎市市民ミュージアムの地下収蔵庫が台風により浸水[4)]したことは、博物館関係者にとって、衝撃的な出来事であった。日本の各地の博物館施設を考えてみると、地下収蔵庫は、地上に比べて温湿度が安定する、地震等による振動を受けにくいなどの利点が挙げられている。

隅田川沿いに立地する江戸東京博物館は、４階に収蔵庫があるが、資料移動に際し、常に昇降機での上下移動を伴うことや、接地していないことによる収蔵庫内の振動などについて、評価が分かれる部分があったと感じている。収蔵庫の配置については、博物館の立地や、収蔵資料の性質などを考慮する必要がある。

今回は、当初計画通りの資料調査を進めることができなかった。今後は、菊竹事務所関係者からの聞

き取りや、さらなる資料の調査を進めていきたい。

（謝辞）
現在、菊竹清訓の著作権については、スミス睦子氏、菊竹雪氏、菊竹三訓氏が管理されている。このたび写真の掲載についてご快諾いただき深く感謝申し上げます。

【註】

1）江戸東京博物館の設計者は菊竹清訓氏に決定という記事「しんけんちく・にゅうす」『新建築』1987年（昭和62）10月号（138頁）
2）鈴木俊一都知事に説明する菊竹清訓（日付に1989年［平成１］６月15日とあり、建築工事が始まるころの写真と思われる）
3）両国駅は1929年（昭和４）に竣工。鉄筋コンクリート造２階建て
4）2019年（令和１）10月12日の令和元年東日本台風によって、川崎市市民ミュージアムは地階にある全ての収蔵庫が浸水し、収蔵品約26万点のうちおよそ23万点が被害に遭った。

【参考文献】

・書籍
菊竹清訓『代謝建築論　か・かた・かたち』彰国社　初版1969年　復刻版2008年４月
菊竹清訓『江戸東京博物館』鹿島出版会　1989年６月
・雑誌
「特集　江戸東京博物館」『季刊　東京人』1987年４月（春）号
「東京都江戸東京博物館の「かたち」」『建築文化』1993年７月号
「都市の新しい姿を求めて　菊竹清訓」『新建築』1993年５月号
「都市環境に対応する博物館」『近代建築』1993年７月号
・展覧会図録
『建築のこころ　アーカイブにみる菊竹清訓』国立近現代建築資料館　2014年10月
『菊竹清訓　山陰と建築』島根県立美術館　2021年３月